

映画・本・歴史のこと



〈第18回〉能登、基隆、九份

有田誠(ありたまこと) 京丹波町在住の映画愛好家。
写真は、金瓜石・九份への道標 (筆者撮影)

能登

十年近く前の事だから、現在はどうか知らない。

石川県の台湾華僑総会の会長陳文筆は、能登の七尾市にある国立病院機構七尾病院の診療部長で内科医だった。

基隆で歯科医をする周振才は、台北医学院卒だが、日本で歯科医をする兄を訪ね、日本が好きに

なった。三十歳を過ぎ、日本語を懸命に勉強した。日本の歯科医師国家試験に一発で合格、開業の地に選んだのが、中能登町だった。住民に愛され、家も購入した。しかし、父が病気で倒れた。父の歯科医院を継ぐため、止むなく基隆に戻った。

一青妙。父が台湾人。母は日本人で、能登の出である。JR七尾線の七尾駅の手前に良川駅と能登二宮駅がある。その間に中能登町、一青という地名が見える。母の姓でもある。

一青妙も歯科医でエッセ

イスト、俳優も兼ねている。

一青妙(顔妙)と九份

一青妙の父顔惠民の実家は基隆にあった。実家と言っても六万坪あり、現在は政府が買い取り、中正公園となっている。顔家は、かつての台湾五大家族(財閥)のひとつである。

日本統治期、九份の金に目をつけた関西財閥の藤田伝三郎が採掘を始めた。石炭も出ていた。一青妙の曾祖父顔雲年は、藤田組から採掘権を受け継ぎ、台陽鋳業(株)を立ち上げた。彼は三井財閥や経済界の木村久太郎と結びつく。鉄道、金融、造船など関連企業五十社以上を経営した。

第一次大戦中、九份の金の産出量は最高に達した。家が九軒(九份の由来)しかなかった土地は、五万人以上が移り住む最盛期を迎える。そして一九七一年に閉山となった。海側に隣接する金瓜石と並んで、植民地時代の日本の風景が多く残る。太平洋の向こうは与那国島である。

このさびれた地域が再び脚光を浴びる。一九八九年、侯孝賢監督の『悲情城市』が公開された。ヴェネツィア映画祭でグランプリをとり、台湾映画が一躍注目された。



鶏籠山上から見た九份(筆者撮影)

大陸から国民党ならずも部隊が上陸。蒋介石、蔣経国の歴史上最長、三十八年の戒厳令を経て、民主化に舵を切った台湾で、初めて二二八事件から白色テロの数年が描かれた。

『悲情城市』がきっかけとなり、今、九份は観光客でごった返す。日本の修学旅行のコースにまでなっている。九份の土地の大部分は、現在も顔家が所有している。九份にある新北市立欽賢国民中学は、祖父顔欽賢の寄付で建てられた。

蒋介石の恐怖政治

一青妙の父惠民は一九二八年生まれ。十歳のとき、弟と二人で日本に留学した。そして、日本の敗戦で台湾に戻った。混乱の続くなか、二二八事件が起きる。祖父欽賢は、事件の処理委員会の中心メンバーとして、国民党当局から指名手配となる。顔家そのものも監視下に置かれた。国外に出ることは不可能だが、惠民は、密航(うそ)して日本に渡った。

二二八事件から白色テロ(権力側からの弾圧行為)の犠牲者の数は不明だが、二二八で殺害処刑されたのが三万人近く、基隆の社寮島(現和平島)の沖繩人集落でも、北京語を解さない沖繩人が三十名ほど殺害された。一九五一年から本格化した白色テロの時期に逮捕、



侯孝賢(中央)・呉念真(左端)・朱天文(右端)
『悲情城市』の出演者と共に

拘禁、銃殺が続き、六万人が殺され、十五万人が投獄されたという。

脚本家呉念真

九份は新北市瑞芳区にある。隣の平溪区とあわせ、石炭産地であった。瑞芳駅から平溪線が出ている。十五キロほどの駅数八つの単線である。もとは途中の三貂嶺から菁桐までの台陽鋳業石底線だった。一九二九年に台湾総督府が買収するまで、顔家が敷設

した石炭輸送線路である。

平溪線を初めて知ったのは、侯孝賢監督の『戀々風塵』(一九八七)のファーストシーンだった。

十分に帰る高校生の男女が、ガラガラの車内で立ったまま本を読んでいる。トンネルだらけの山あいを一輛だけで走っていく。十分に到着。線路際の商店で、女子高生は米を受け取る。男の子がそれを持ってやる。線路脇に、巡回映画会のスクリーンがはられ、風になびいている。

侯孝賢作品の脚本と言えば朱天文だが、呉念真も先述の二本をはじめ、何作も担当している。呉念真は瑞芳の生まれ。父は九份、金瓜石で三十年九份を舞台にした作品

に初監督作品でもある『多桑』(一九九二)、『八番坑口的新娘』(一九八五)、王童監督の『無言の丘』(一九九二)などがある。『無言の丘』は、この八月いっぱいまでの台湾巨匠傑作作品選で全国上映される。

た。「あの顔家か」と呉念真は驚き、九份の話して盛り上がったとのこと。

酒井充子監督

『多桑』は自伝的映画で、ナレーションも担当している。父さん(蔡振南)は、自分を「昭和四年生まれ」と言う。いつもNHKの短波放送を聴いている。植民地時代に日本人としての教育を受けた。戦後の九份の鋳夫たちやその家族の日常が描かれる。父さんは、長年の鋳山での仕事で肺を病み、病院の窓から飛び降り自殺をする。

台湾三部作を撮った記録映画監督酒井充子は、北海道新聞の記者時代、初めて台湾を旅行した。九份で日本語を話す老人に出会ったのがきっかけで、第一作『台湾人生』(二〇〇九)を完成させた。日本語世代の台湾人五人の語りで構成される。過去を現在につなぎ、共に未来に向ける酒井監督の姿勢に大いに共感した。

過去を隠蔽、改竄したい権力者は、「未来志向」という言葉を好む。(敬称略)

【参考図書】

一青妙「わたしの東海岸」(新潮社二〇一六)
与那原恵『台湾 記憶の島』(文藝春秋二〇一六年八月号 文春)